様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０２３８８

研究課題名（和文）保育者養成におけるブレンディドラーニングを用いた保護者との関係構築力の育成

研究課題名（英文）Developing relationship-building skills with parents using blended learning in ECEC teacher training.

研究代表者
小原　敏郎（Ohara, Toshio）

共立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：３０４３９１６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主体的かつ効率的に学べる教育プログラムとしてe-ラーニングと対面授業を取り入れたブレンディドラーニング（BL）プログラムを開発した。開発したBLプログラムの効果を検証するため、二つの大学の保育者養成課程に在籍する3年生を対象にBLプログラム（授業の4回分）を実施し、プログラムの前後、フォローアップ評価としてプログラム終了約1か月後に得点を測定した。この結果、二つの大学で共通して「保護者の自己決定の尊重」「支援のために環境構成」といった項目でBLプログラム後の値が有意に高いことが示され、おおむねBLプログラムの学習効果を検証できた。さらに、研究成果を作成したＨＰによって公開できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来の保育者養成教育における保護者支援の学びは、知識獲得型の学習に留まっている場合が多かった。本研究で開発されたBLプログラムは、保育者養成教育における学修効果を検証することができた。さらに、プログラム開発の過程でICT環境を活用して従来の教授法をBLプログラムとして統合することができるという示唆が得られ、教育課程における応用の幅広さが意義として考えられる。
　また、保護者支援は保育者の早期離職やリアリティ・ショックと深く関係しているため、本研究の成果を新任保育者の研修などに活用することで、これらの課題の予防につなげることができる。

研究成果の概要（英文）：In this study, a blended learning (BL) programme incorporating e-learning and face-to-face classes was developed as an educational programme that enables independent and efficient learning. In order to verify the effectiveness of the developed BL programme, the BL programme (four sessions of classes) was implemented for third-year students enrolled in ECEC teacher training courses at two universities, and scores were measured before and after the programme and approximately one month after the programme ended as a follow-up evaluation. The results showed that the values after the BL programme were significantly higher in items such as ‘respect for self-determination of parents’ and ‘environmental configuration for support’, which were common to the two universities, and generally verified the learning effects of the BL programme. Furthermore, the research results could be made public through the website that was created.

研究分野：子ども学および保育学関連

キーワード：保育者養成教育　子育て支援　e-ラーニング　ブレンディドラーニング　保護者との関係構築力　リアリティ・ショック

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、保育者のリアリティ・ショック（以下、RS）に関する研究では、「保護者支援の難しさ」が RS を構成する要因として見出されている（小原他,2017）。また、20 代の若手保育者においても、保護者支援に苦手意識を抱えている保育者が多いことが示されている（例えば、片山,2015）。しかし、現状の保育者養成教育では、保育現場の実習においても保護者とあいさつを交わす程度で、それ以上の関わりの経験は一部に留まっているという指摘（石田・田中,2011）があり、保護者支援の学びが知識獲得型の学習に留まっている場合が多い。

他方、保育者養成と同様に直接的な対人援助技術の習得が不可欠な看護師養成の領域では、疑似体験を促す動画視聴やグループワークなどの対話型学習を組み合わせて応用力の獲得を目指すブレンディドラーニング（以下、BL）プログラムの効果を検証する研究（例えば、山住他,2018）がなされ始めている。保育者養成教育の保護者支援の学びにおいても、BL プログラムの教材開発および保育者養成教育における効果の検証が喫緊な課題と考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、保育者養成教育における保護者支援の学びについて、①BL プログラムの事前・事後学習で使用する e-ラーニング教材を開発すること、②開発した e-ラーニング教材を用いた BL プログラムを保育者養成の授業で実践し、その効果を明らかにすること、である。

３．研究の方法

（１）e-ラーニング教材の開発

①2021 年 4 月～9 月の期間、本研究ら 3 名がインストラクショナル・デザイン（Instructional Design:以下 ID）プロセスの一般形である ADDIE モデル（Gagne,R.E et al,2005）を援用して e-ラーニング教材の開発を行った。

②2021 年 10 月～12 月の期間、保育所・幼稚園・認定こども園に勤務している保育者 14 名、乳幼児を子育している母親 12 名にアンケート調査を実施した。本研究者らが開発した保護者と保育者が関わる e-ラーニング教材を視聴してもらい、保育者には「あなたならどのように言葉かけしますか」「その理由を書いてください」と回答を求め、保護者には、「保育者にどのように言葉かけしてもらいたいか」「その理由を書いてください」と回答を求めた。さらに、保育者、保護者ともに「課題を行った感想を記入してください」と回答を求めた。

③倫理的配慮

アンケート調査に関しては、回答は自由意思であり、調査に回答しないことによって不利益を被ることがないことを説明した上で回答を求めた。研究への同意に関しては回答することによって同意が成立し、回答後の同意の撤回は出来ないことを説明した。

（２）保育者養成の授業で実践した BL プログラムの効果測定

①対象と期間：K 大学及び D 大学の保育者養成課程に在籍する 3 年生でプログラム前後のデータが揃っている K 大学 79 名、D 大学 45 名。期間：2023 年 6 月～8 月

②手続き：保育士養成課程の必修科目である「子育て支援」において BL プログラムを、半期授業の中で 4 回の授業回で実施

効果を測定した項目

・川上・向後（2013）の学習者が特定の科目に関してどのように動機づけられたのかを測定することを目的に作成された「ARCS 動機づけモデルに基づく Course Interest Survey」日本語版項目（5 件法、14 項目）

・小原・安部（2018）が開発した学生の保護者との関係構築力を測定する項目（5 件法、12 項目）

（３）倫理的配慮：本研究は、K 大学、D 大学の研究倫理審査委員会で承認を受けて実施した。

４．研究成果

（１）e-ラーニング教材の開発

今回開発した e ラーニング教材は、「保育所等を利用している保護者および地域の保護者との関係構築力を育むことを目標とすること」「保育者が日常の保護者との関わりで経験する頻度の高い場面を採用すること」といった観点から以下の４つの場面を設定した。

場面①：トイレットトレーニングに関する相談の場面 2 歳 1 か月の男児の母親から「子どものオムツがまだ外れずなんとかしたい」と相談される場面 場面②：子どもの園での様子（行事への参加）を伝える場面 運動会の練習を行っている時期、５歳４か月の女児お母さんから、子どもがお家で「園が楽しくない。行きたくない」と言っていると相談される場面 場面③：園の方針を保護者に伝える場面 3 歳児クラスに進級後間もない女児（3 歳 5 か月）が登園時、大好きなアニメのキャラクターの本をどうしても園にもっていくと言ってきかず、泣いている。このような登園時の保護者と保育者の関わりの場面 場面④：仕事と育児の両立に悩む保護者に関わる場面 親職場復帰をして間もない頃、二人の子ども（1 歳 6 か月の男児と４歳２か月の女児）を育てる母親は表情が暗く、育児にも自信をなくしている様子が見られる。このような保護者と保育者の関わりの場面

保育者や保護者に回答を求めた e ラーニング教材の評価は、「保育者が日常の保護者との関わりで経験する頻度の高い場面を採用すること」という点で、場面①から場面④とも、保育者の回答では、「毎年必ずある相談」「先日、少し似たような事例があった」「実際に経験をしたことがあった」といった回答がみられた。このことから実際の保育場面で経験しうる場面であることが一定程度示された。さらに、保育者や保護者からの意見や課題を集約することで、e-ラーニング教材の改善を進めることができた。

（２）保育者養成の授業で実践した BL プログラムの効果測定

BL プログラム前後の「保護者との関係構築力」項目の変化の結果が表１である。対応のある t 検定を行った。

表１　BL プログラム前後の効果

上段：平均値、下段：（標準偏差）	K 大学（n=79）			D 大学（n=45）		
	事前	事後	有意差	事前	事後	有意差
1-1 保護者と子どもの成長を共に喜ぶことができますか	4.63	4.68		4.67	4.58	
	(0.54)	(0.47)		(0.56)	(0.58)	
1-2 保護者と笑顔であいさつや受け答えができますか	4.71	4.71		4.58	4.47	
	(0.53)	(0.46)		(0.58)	(0.59)	
1-3 保護者の話をしっかり聞くことができますか	4.53	4.58		4.27	4.38	
	(0.57)	(0.55)		(0.78)	(0.68)	
1-4 保護者の考えや思いを尊重できますか	4.29	4.61	**	4.11	4.47	**
	(0.64)	(0.52)		(0.75)	(0.55)	
1-5 保護者に行っている活動の目的や意図を説明することができますか	3.59	3.85	**	3.47	3.87	**
	(0.84)	(0.64)		(0.92)	(0.66)	
2-1 保護者に子育てに関する助言ができますか	2.99	3.63	**	3.11	3.40	
	(0.93)	(0.72)		(0.96)	(0.96)	
2-2 保護者に子育てに関する情報を提供することができますか	2.99	3.34	**	3.18	3.49	*
	(0.95)	(0.80)		(1.03)	(1.01)	
2-3 保護者に子どもとのかかわりの見本を示すことができますか	3.19	3.61	**	3.31	3.49	
	(0.85)	(0.63)		(0.87)	(0.97)	
2-4 保護者の抱えている課題等を読みとることができますか	3.10	3.90	**	3.20	3.58	**
	(0.93)	(0.63)		(0.92)	(0.84)	
2-5 観察を通して保護者の人柄や考え方を理解できますか	3.59	4.11	**	3.56	3.82	
	(0.86)	(0.62)		(0.89)	(0.81)	
3-1 親子の状況に応じて素材・環境を見直すことができますか	3.42	3.89	**	3.36	3.84	**
	(0.89)	(0.58)		(0.91)	(0.71)	
3-2 親子の活動をするために必要な素材・環境を準備することができますか	3.35	3.82	**	3.42	3.82	**
	(0.92)	(0.75)		(0.89)	(0.58)	

* p<.05 ** p<.01

結果からは、e-ラーニングに事前・事後学習と対面でのアクティブラーニングを組み合わせた BL プログラムの効果が示された。

1-1〜1-5 は、保護者との相互理解に関する項目である。1-5 以外は二つの大学ともプログラム前後の値が 4.0 を超えており、もともとの値が高いことが示された。二つの大学とも有意差が見られた「保護者の考えや思いを尊重できる(1-4)」、「活動の目的や意図を説明できる(1-5)」は、受容・保護者の自己決定の尊重に関する項目であり、BL プログラムがこれらの内容の学びに寄与することが示された。2-1〜2-5 は、支援ニーズの把握と支援の実施に関する項目である。K 大学ではすべての項目でプログラム後に有意に高い値がみられた。D 大学では、「子育てに関する助言(2-1)」「関わりの見本を示す(2-3)」「保護者の人柄や考えの理解(2-5)」といった項目でプログラム後の値が高いものの、有意差は見られなかった。二つの大学間で差が見られたことの理由は、D 大学の学生がプログラムの内容を難しく捉えたことによるプログラムへの動機づけが影響していると考えられた。3-1〜3-2 は、支援のための環境構成であり、二つの大学ともプログラム後に有意差が見られた。

引用文献

Gagne, R. M., Wager, W.W., Golas, K. C. & Keller, J. M (2005). Principles of Instructional Design (5th edition). California: Wadsworth.

石田開・田中まさ子（2011）保育者養成課程の学外実習における保護者に関する経験の頻度-保護者とのコミュニケーションスキル育成への手がかりとして-,岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要 43,161-173

片山美香（2015）若手保育者による保護者支援の困難さと対応に関する検討 -経験に基づく保育者としての成長過程に着目して-, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録,159,11-20

川上祐子，向後千春 (2013) ARCS 動機づけ モデルに基づく Course Interest Survey 日本語

版尺度の検討．日本教育工学会研究報告集,13-1,289-294
小原敏郎・義永睦子・瑞穂優・田中佑子（2017）保育者のリアリティ・ショック尺度の作成，保育者養成教育研究, 1 ,13-23
小原敏郎・安部久美（2018）保育者養成校における学生の保育・子育て支援活動の社会的スキル、子育て支援力・保育観の検討，共立女子大学家政学部紀要 ,64,109-121
山住康恵・櫻井美奈・中村昌子・池田康子・横山晶子・中原るり子（2018）ブレンディッドラーニングを用いた基礎看護技術の授業を試みて：ベッドメイキングの単元を事例として, 共立女子大学看護学雑誌,5,26-34

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小原敏郎・恒川丹・三浦主博	４．巻 69
２．論文標題 保護者との関係構築力の育成を目指すブレンディッドラーニング教材の開発	５．発行年 2023年
３．雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	６．最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小原敏郎・恒川丹・三浦主博
２．発表標題 保育者養成におけるブレンディドラーニングを用いた保護者との関係構築力の育成を目指した授業実践について(2)
３．学会等名 日本保育学会第76回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小原敏郎・恒川丹・三浦主博
２．発表標題 保育者養成におけるブレンディドラーニングを用いた保護者との関係構築力の育成を目指した授業実践について(3)
３．学会等名 日本保育者養成教育学会第8回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 渡邊恵梨佳・井口武俊・井出沙里・大城亜水・越智紀子・川島直子・橋本好市・宮田徹・三浦主博・小原敏郎
２．発表標題 台湾における幼児園と保育者養成校の視察報告
３．学会等名 日本保育者養成教育学会第8回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 小原敏郎・恒川丹・三浦主博
２．発表標題 保護者との関係構築力の育成を目指すICTを活用した教材開発について
３．学会等名 日本保育者養成教育学会第6回研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 三浦主博・小原敏郎・恒川丹
２．発表標題 保育者養成におけるブレンディドラーニングを用いた保護者との関係構築力の育成を目指した授業実践について
３．学会等名 日本保育学会第75回研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 恒川丹
２．発表標題 情報化社会における『自己・人・もの』関係：情報化社会の基本、保育者養成教育における活用
３．学会等名 日本関係学会第44回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 恒川丹・小原敏郎・三浦主博
２．発表標題 保護者との関係構築力の育成を目指すICTを活用した教材開発について（２）
３．学会等名 日本保育者養成教育学会第7回研究大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ブレンディドラーニング教材 https://kosodatetoday.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三浦　主博 (Miura Kimihiro) (70310183)	仙台白百合女子大学・人間学部・教授 (31309)	
研究分担者	恒川　丹 (Tunekawa Akira) (30898846)	田園調布学園大学・子ども未来学部・助教 (32720)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関